

提出日	令和3年3月16日	記入者	荒井佑介
団体名	ふりがな：とくていひえいりかつどうほうじん さんかくしゃ 特定非営利活動法人サンカクシャ <input type="checkbox"/> 任意団体 <input checked="" type="checkbox"/> NPO法人 <input type="checkbox"/> 一般社団法人 <input type="checkbox"/> 企業 <input type="checkbox"/> その他()		
協働団体	1. 行政 ・教育センター 2. 地域 ・文京区社会福祉協議会 ・てらまっち、こまじいのうち等、地域の居場所運営者 3. 大学 ・跡見学園女子大学坂東ゼミ		
自団体 および 協働団体 の 役割分担	【自団体】 子ども若者の家庭訪問やアウトリーチを行うボランティアのマネジメントと育成を行う。関係機関とのケース会議で子どもの気持ちや想いの代弁、子どもを取り巻く環境の情報提供。 【協働団体】 1. 行政 ・教育センター：不登校の小中学生や義務教育卒業後のボランティアの関わりを望む子ども若者のケースの紹介・ケース会議の開催、情報共有 2. 地域 ・文京区社会福祉協議会：サンカクシャへ子ども若者の紹介、地域団体との連絡調整、支援記録の作成 ・地域の居場所運営者：文京区社会福祉協議会へ子ども若者の情報提供 サンカクシャのアウトリーチに協力、情報提供 3. 大学 ・ボランティア研修の協力、大学資源の活用の協働、ボランティアやアルバイトの公募の告知協力(跡見学園女子大学坂東ゼミ)		
担当者名	塚本 いづみ	役職等	事務局長補佐
事業名	孤立した子ども若者を支える、行政と地域のつなぎ支援モデル事業		

<p>部門 (1か2 いずれか ○)</p>	<p>1. 課題解決部門(該当の場合、いずれかの番号に○)</p> <p>(1) 高齢者の特殊詐欺被害を予防するための活動</p> <p>② 地域コミュニティの価値を見直し、新たなつながりが広がる活動</p> <p>(3) 男性高齢者の継続的な参加につながる社会参加を促すための活動</p> <p>(4) 介護の魅力を広く啓発し、様々な担い手と事業所のマッチングを図るための活動</p> <p>⑤ 中学校卒業後の不登校等の孤立状態に対応できるボランティアを育成するための活動</p> <p>⑥ 外国にルーツがある児童・生徒についての生活や学習支援活動</p> <p>(7) その他、団体の専門性を生かしたテーマで提案された取り組み</p> <p>2. 地域活性化部門</p>
<p>提案背景 目的 地域のどんな 課題を解決し たいかを明記</p>	<p>背景</p> <p>1、中学校を卒業すると、義務教育終了後の教育機関の支援が取り切れてしまうことと、18歳になると児童福祉法の支援対象外となるなど、思春期の子ども若者の行政の支援が薄くなってしまっている現状がある。貧困や虐待や不登校など課題を抱える子ども若者が増え、全国的に様々な支援が行われているが、「福祉や行政の支援につながらない若者・子どもにどう出会い、どう支援するか」という課題は依然として残っている。</p> <p>2. 令和元年度の活動</p> <p>(1) 家庭訪問事業</p> <p>不登校や引きこもりで地域の中で孤立している子ども・若者が、他者との交流の機会として、地域の人材（非専門職のボランティア）と出会える機会づくりを行った。</p> <p>①文京区在住在勤の大学生を中心に文京区外からボランティアを公募。</p> <p>②教育センターや社会福祉協議会からボランティアの関わりのニーズがある子ども若者の情報提供と、紹介を受けた。</p> <p>③スクールソーシャルワーカー又は、地域福祉コーディネーターと、サンカクシャのソーシャルワーカーが子ども若者に会いに行き、本人と連絡先交換と、本人の特徴や特性を把握し、ボランティアとマッチング。</p> <p>④ソーシャルワーカーがボランティアと一緒に子ども若者の家庭訪問。</p> <p>④家庭訪問をして、子ども若者が好きなゲームや遊びを、ボランティアと一緒にして、楽しい時間を一緒に過ごす。</p> <p>⑤ボランティアは、サンカクシャ・ソーシャルワーカーに情報提供。</p> <p>⑥ソーシャルワーカーによって、ケース会議や電話連絡を通して、子どもの様子や、家庭環境などの情報を本人の了承を得て、関係機関に共有。</p> <p>(2) ボランティア育成</p> <p>子ども若者にとって「会いたい存在」すなわち何か困ったことがあったら話してもいいかなと思える、お兄さん・お姉さんのような存在になるためにはどのような人材育成が必要か検討を繰り返した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題 ボランティアのモチベーションを保つための工夫

	<p>居場所の見学など活動を共にする上で、それぞれのキャラクターや役割を明確にするための交流をメインで行った。</p> <p>また、スタッフ及びボランティアで子ども若者との関わりを共有し、より良い支援を作るためケース会議及び研修を合計 14 回実施した。</p> <p>その他、オンラインで活動するボランティアを集めるために説明会を実施し、8 名がオンラインのみでボランティア参加することとなった。</p>
<p>協働団体 or 利用者 の声</p>	<p>●文京区教育委員会教育推進部教育センター主査（心理）教育相談コーディネーター 石津陽子氏</p> <p>サンカクシャとは、教育センターでスクールソーシャルワーカーや総合相談室で相談をしている（た）お子さんの紹介先として連携しています。</p> <p>高校に所属しているけれど、人間関係に悩みがあったり、親子関係がぎくしゃくしていたり、就労したけれど職場以外の人とつながりたい、などそれぞれの事情があります。サンカクシャの居場所に来て、ゆるく、スタッフや来ている子ども達とつながることで、一人ではないという安心感を得ることができるようです。</p> <p>紹介した子どもの様子を見に行きましたが、持参したゲームを一人でしているときもあれば、来ているスタッフや仲間とボードゲームを楽しんでいることもあり、自分のペースでゆったりと過ごしていました。自分が自分らしくいられる空間やそれを認めてくれる関係性があることで、嫌なことがあってもどうにか日々を過ごしていく力を得られるのだと感じました。</p> <p>継続的な伴走が必要なお子さん達なので、相談の切れ目が人との縁の切れ目にならないように丁寧に信頼できる紹介先につなげることを大切にしています。</p> <p>サンカクシャは、信頼できる紹介先の一つとして、これからも連携を深めて関係を築いていきたいと願っています。</p>
<p>協働による効果</p>	<p>①大学との人材育成及び連携体制の構築</p> <p>これまで教育センターや地域の団体から子ども若者を紹介してもらい、家庭訪問やボランティアとの関わりを作ってきた。しかし、子ども若者の保護者、連携機関、連携する地域団体からすると、他所からきた NPO の支援者を信頼していただくことはとても時間がかかることであり、1 件 1 件子ども若者を丁寧にサポートし、実績を積み重ねていくことで連携が拡大していくと考えている。もちろん、この地道な連携は継続していくが、今回大学、特に跡見学園女子大学の板東ゼミと定期的にコミュニケーションを取ることができ、10 月からゼミ生の活動参加が始まり、交流が生まれた。1 つの NPO が窓口になるよりも、こうした大学と連携したプロジェクト、相談支援という体制が構築できると、保護者をはじめ連携機関と信頼関係が築きやすくなるため、大学のゼミとの連携は一つの成果と言える。</p> <p>活動開始当初から大学との連携を見据えていたが本年度からようやくその体制が作れる土台ができた。本年度はコロナの影響を受け、活動をオンライン化せざるを得なくなった。オンライン上で関わるボランティアを募集したものの、オンライン上だけ</p>

	<p>の関わりだと継続率が低かった。</p> <p>そのため、公募するのではなく、大学のゼミ単位と連携すると、毎年継続的に学生が参加してくれる仕組みが構築できるため、まずは板東ゼミと一緒に家庭訪問や子ども若者の個別訪問をする体制を構築し、徐々に他大学も巻き込んでいく仕組みを作っていきたい。</p> <p>②東京都のユースソーシャルワーカーとの連携の土台作り</p> <p>本年度の後半から教育センターの方々と不登校が深刻化する前からつながる方法と、高校生年代とつながる方法を模索し始めた。不登校が深刻化する前からのつながりは、大学と連携し、相談窓口を構え、中学校と連携していく仕組みを作っていくことを見据えて活動を進めている。高校生年代の繋がりには高校との連携、特にユースソーシャルワーカーとの連携が必要だと話があたり、都のユースソーシャルワーカーのスーパーバイザーである土屋佳子先生と教育センターの方々のご協力を得て、打ち合わせの機会をいただいた。義務教育終了後に支援が途切れやすくなってしまいう現状の課題意識を共有したところ、他区でも同じような声が上がっており、何か仕組みを考えなければと課題意識に共感していただいた。今後、東京都とも連携し、不登校の子ども若者が孤立せず地域で見守り続けられる体制を構築していきたい。</p>
<p>事業成果 および 今後の活動予定</p>	<p>■事業成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・活動の理念やスタンスに共感したボランティアの継続参加 <p>本年度は、公募したボランティア 15 名、跡見学園女子大学の板東ゼミからのボランティア 8 名に活動に参加していただき、子ども若者の家庭訪問等の関わりをサポートしていただいた。公募したボランティアのうち、オンラインで関わるボランティアを募集したものの、そのメンバーはほぼ活動継続しなかった。要因としては、オンラインだけで関わると、ボランティア同士、ボランティアとスタッフの交流が深められないため、定着が難しかった。</p> <p>しかし、継続したボランティアに関しては、継続的に活動に参加し、ケース会議などにも出席しているため、活動における共通理念などがかなり浸透したように感じる。また、跡見女子学園大学の板東ゼミとは来年度も連携が決まっているため、定期的に活動参加するボランティアが見込める予定である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍に対応したオンラインでの家庭訪問の実施 <p>家庭訪問は不登校の傾向にあり、居場所など複数の方がいる場にはいけない子ども若者に実施しているものであり、丁寧に関係構築をしていく必要がある。</p> <p>しかし、本年度はコロナの影響もあり、オンラインでの対応をせざるを得なかった。いち早くオンライン化の対応を行い、zoom や団体の公式 LINE、電話など対面ではない形式で活動を作った。</p> <p>1 年を通じて、対面の家庭訪問件数は、延べ 26 回と少なかったが、オンラインでの家庭訪問件数は、134 回行った。(ボランティアのケース会議や研修、交流会などは年 14 回をオンラインで実施した。)</p> <p>オンラインということで、最初は画面をオフにしてほとんど話してくれない子ども</p>

若者が多かったが、徐々にオンライン上で一緒にゲームをすることや会話をすることができるようになり、関係ができると次第に居場所などに来ることができるケースも増えた。

オンラインは最初の壁さえクリアすると、対面での大人不安が軽減された状態で関係構築ができるのではないかと感じ、一定の手応えを感じつつ、特定の趣味や興味関心がないと話が続かなく関係構築が難しいなどの課題も見つかった。

コロナ禍の影響で家に居場所がない、人との交流が減ったという子ども若者にこれからもオンラインでの対面でも楽しく心が安らげるような1対1の会話の時間を作っていきたい。

■今後の活動予定

・大学と連携した家庭訪問及び個別対応の開始

大学のゼミと連携することで、ゼミ生が活動に継続的に参加してくれることや、板東先生が活動に対してのアドバイスなどをいただけること、また連携しているということで行政や地域に対しても信頼を担保することができると考えている。

今後、大学との連携も見据え、ボランティアマネジメントの専属の担当を配置し、ボランティアの募集や活動への参加の管理、活動後のフォローなどの体制を構築する。特に、研修や育成の体制を強化し、活動に参加する大学生が研修などを通じて、サンカクシャの理念や活動のスタンスなど、初めて参加するボランティアでも理解し、活動に落とし込めるよう人材育成プログラムを構築していきたい。

・中学校との連携作り

これまで教育センターや地域の支援団体と連携を重ねてきたが、今後は中学校との連携も見据えていきたい。

中学校と連携することで、不登校の生徒に早期介入ができること、また相談件数を増やすことを見込めるのではないかと考えている。

不登校が深刻化した際にアプローチをするのではなく、早い段階から、ちょっと気になる子を早めに紹介してもらい、家庭訪問等でサポートできると、不登校の予防や早期改善に貢献できるのではないかと考えている。

そのために、中学校と連携していきたい。

中学校と連携する際には、団体への信頼や実績も必要になると考え、その際に大学との連携した相談窓口作りなどを行うことで、少しは活動に対して信頼性が増すと考えている。

※別紙1：事業スケジュール [報告版]

※別紙2：収支決算報告

※別紙3：関係者マップ [報告版] (提案時の確定版と比較できる状態)

※追加別添1：この事業を通じて制作したチラシなどのデータ

※追加別添2：この事業の様子が分かる公開可能な写真データ (10枚以内)

作成日：令和3年3月16日

団体名：特定非営利活動法人サンカクシャ

事業名	孤立した子ども若者を支える、行政と地域のつなぎ支援モデル事業
------------	--------------------------------

月	実施内容				
	教育センターとの会議	対面の家庭訪問およびオンラインでの訪問	ボランティア募集	ボランティアとのケース会議や研修、交流会	
令和2年4月		対面訪問：4回 オンライン訪問：12回		ケース会議・研修・交流会の実施：2回	
5月		対面訪問：2回 オンライン訪問：19回		ケース会議・研修・交流会の実施：1回	
6月	教育センターとの月一回の定例会議の開始	対面訪問：0回 オンライン訪問：11回		ケース会議・研修・交流会の実施：1回	
7月	教育センターとの定例会議の実施	対面訪問：0回 オンライン訪問：15回	オンライン説明会実施 8名が応募活動に参加	ケース会議・研修・交流会の実施：1回	
8月	教育センターとの定例会議の実施	対面訪問：0回 オンライン訪問：15回		ケース会議・研修・交流会の実施：1回	
9月	教育センターとの定例会議の実施	対面訪問：4回 オンライン訪問：12回		ケース会議・研修・交流会の実施：2回	
10月	教育センターとの定例会議の実施	対面訪問：4回 オンライン訪問：14回		ケース会議・研修・交流会の実施：1回	
11月	教育センターとの定例会議の実施	対面訪問：7回 オンライン訪問：8回		ケース会議・研修・交流会の実施：3回	
12月		対面訪問：4回 オンライン訪問：8回		ケース会議・研修・交流会の実施：0回	
令和3年1月	教育センターとの定例会議の実施	対面訪問：1回 オンライン訪問：12回		ケース会議・研修・交流会の実施：1回	
2月		対面訪問：0回 オンライン訪問：8回		ケース会議・研修・交流会の実施：1回	
3月					

様式第8号 別紙2:収支決算報告

作成日 : 令和 3年 3月16日

「Bチャレ」提案公募型協働事業【令和2年度】

団体名 : 特定非営利活動法人サンカクシャ

収入 1,000,558 円

費目	決算額	積算根拠
「Bチャレ」助成金	1,000,000 円	課題解決部門
自己資金	558 円	
	円	

支出 1,000,558 円

費目	決算額	積算根拠
人件費	564,000 円	子ども若者の家庭訪問及び個別支援相談員時給1600円×352.5時間(1名)
事務局人件費	352,400 円	事業の進捗管理、及びボランティアコーディネーター等の事務局職員時給1600円×220.25時間(3名)
交通費	84,158 円	職員・ボランティア交通費
	円	
	円	
	円	
	円	
	円	

